Osaka University Knowledge Archive

Title	『宵庚申』『二つ腹帯』にみる近松・海音の文体
Author(s)	松平, 進
Citation	語文. 1966, 26, p. 9-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68570
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『宵庚申』『二つ腹帯』にみる
近松・海音の文体

松平　進

一

作者としての近松と海音を、同一水準に置いて比較論じたのは、文化初年『反古籠』の「門左衛門は人麿の如く孔明の如し。海音は赤人の如く仲達の如し」が遡り得る上限らしく、それ以前に同種の批評のある事を知らない。近松に関して詳細である『今昔操年代記』(享保十二年)も、海音に関しては、豊竹座の説明中で作者として名前を一度あげるほかは別に記す事も無く、ただ近松の辞世をのせた後に「平安堂のながれをくんで一作なさるゝ人々近年出来、一、紀海音……」と記すのみである。『竹豊故事』(宝暦六年)も同様、「浄瑠璃作者並近松氏之事」と一章を設けている近松の伝記のあとに、わずか、錦文流・村上嘉助・紀の海音……と名前を列記している。同時代及び近接した後代の海音評価が、近松に対してどうであったかは、これらわずかな例からでもほぼ想像できるのではあるまいか。『反古籠』より下って、安政二年『浪速人傑談』は、ある老人の説として「近松氏は学力厚きにすぎて其名高けれど其作古風にして、婦女童蒙の耳に入がたき所あり、海音氏の作は、あらたにして能田夫児輩にわかりやすし」という評をあげている。これは海音称讃ではあるが、批評の基準が下げられているわけで、それが引上げられれば美点はそのまま欠点になる。ただ『反古籠』の場合と同様、とにかく両者が比較の水準にあるという見地に立っている事が注意される。つまりおぼろげながら、近世中期以降に、海音評価にある変化があったと見ていいだろう。

明治に入って、例えば水谷不倒氏『続帝国文庫・紀海音浄瑠璃集』解題(明治三十二年一月)の如く、「門左衛門と海音とは、これを同等に見るべからざる事論なし」と、頭から否定する意見も無いではないが、概して肯定的で、比較論は長く命脈をつないで行く。と言うより海音作品論は常に比較論で、殆んど必ず近松のひきあいに出されて来た。対抗競争した二座の同時代作家の事ゆえ、比較の根拠は十分有るわけだが、その際、これ又殆んど必ず近松の引立て役を振り当てられた海音は、不運な作家と言わねばなるまい。そういった比較論の嚆矢に位置する藤村作氏「紀海音の世話浄瑠璃」(『国語と国文学』大正三年六月)を見よう。

これによると、海音の特色の第一は、内容面から見て近松と正反対に「義理を主位に置いて人情を従位に置いた所……義理を重んじて人情を軽んじてゐる点」であり、且つ、近松は義理と人情が作中

で混然と結びつき双方共に人を感泣させるが、海音は、義理の表現さえ近松に及ばず、有効でないと言う。さらに形式面から「事件の外相も亦道理の筋道も尋常平板に過ぎて、景を人形劇の舞台上に想像しても目立たず、華々しからず、理情の上で、ひどく人を感激せしむべきものが無い。」と述べ「近松は人情作家・彼は義理作家」「近松は人情の人、愛の人……彼は知の人、理の人」と結論している。藤村氏のこの論文はいわば比較論の原型で、以後、黒木勘蔵氏「紀海音研究」(新潮社『日本文学講座』江戸時代下、昭和三年)が、この説を敷衍し文章の特色をも含めて行届いた研究をされた後は、例えば増田四郎氏「紀海音の研究」(改造社『日本文学講座』10、同八年)が、海音の「道楽気」を指摘した如く、それぞれ興味深い展開を見せつつ、原則的な点では一貫していて、守随憲治氏「海音・出雲・半二」(岩波講座『日本文学』同七年)、樋口慶千代氏「傑作浄瑠璃集上」解題(『評釈江戸文学叢書』同十年)、祐田善雄氏「紀海音の著作年代考証とその作品傾向」(『国語国文』同十一年)「海音の時代」(『上方』一二九号、同十六年)、吉永孝雄氏「紀海音の一生」(同誌)、近石泰秋氏「紀海音の時代物浄瑠璃」(同誌)、園田民雄氏「紀海音」(『浄瑠璃作者の研究』第三章、同十九年)、高野正巳氏「近松と海音の交渉」(『国語と国文学』同二十五年)、「紀海音と近松」(『近松とその伝統芸能』・一二、同四十年)、広末保氏「近松の芸術(附)紀海音」(岩波講座『日本文学史』同三十三年)等々をへて、最近の、海音の世話物の特質をその俳諧・生活環境・若太夫との関連において総合的に把えられた横山正氏「世話浄瑠璃における海音の手法」(『近世文芸稿」9、同三十九年)に至るまで、該博な貴重な研究が、私の前に残されているわけである。すでに近石氏は前掲論文で、従来の海音研究をまとめて、

一理智的な作者である　二人情より義理の精神を強調してゐる　三叙述的・散文的客観的平板である　四結構整然として理に詰んでゐる　五場面の変化に乏しく芸術的情調が之に伴ってゐない　六流用・翻案・改作・撮合が多い

の六項をあげておられるが、恐らくこれに異論をはさむ人はあるまい。

海音研究も、近松研究の場合と同様、浄瑠璃詞章の比較だけでは意味が無く、太夫・興行などを含めて考えるべきだという立場は当然あって、前記『上方』の諸論文はそれであった。巻頭論文・守随氏「紀海音の位置」がそれを明言し、祐田・吉永氏はすでに従前から一貫してその立場であった。ただその場合も発言を詞章に関わる点に限ってみると(そうしては研究の意図には全くそわないわけだが)、従来の研究を全て否定するものではない。つまり立場の相違を含めても、海音近松の比較論には、もう結論が出ている。

唯彼の作品は上野少掾の美聲とお山人形遣、辰松八郎兵衛の技によって、人気を保たれてゐたので、作品そのものから考へるとどうしても近松の敵ではなかったかと思はれる。

吉永氏の前掲論文の一部だが、これ又異論の余地はあるまい。

ところで近松を海音の上に置くその根拠の重要な一点に、近松は情の作家海音は知の作家という常識があった。つまり情を知の上に置く事、少なくとも浄瑠璃に関しては、情を知より重く見る事が通用している。浄瑠璃は情緒的な作物、しつとりとした情緒纒綿たるものと見るわけである。では仮に、浄瑠璃を知的な作物とすると海音は近松の上に立つのか。さらに情の人・知の人又は人情作家・義

理作家とはどういう意味か――人情を知的に描くという事はあり得ないのだろうか。もっとも、情・知に「的」を附したこの評語は曖昧をきわめていて議論を進めて行く上では有効な術語ではあるまい。私はただ、先に見て来た従来の研究で常識化している評価に異論があるわけでは全く無く、比較に恰好の二作品に関して私なりの方法で、情的とか知的とか言われて来た側面を吟味してみたいだけである。

二

何故お千代は去られたか。仮にこの設問をたててみる。「宵庚申」「二ツ腹帯」の両作品全体に比較の網の目を行きわたらせる事は不可能でもあり無意味でもあるので、この設問を解く事に限ってみたい。もとよりこれは事新しい設問ではなく、例えば先にもあげた樋口慶千代氏『傑作浄瑠璃集上』によると、こう言った設問に丁度答える形で、次の如く原因を分析している。

①近松『心中宵庚申』の評より

半兵衛夫婦の姑は、ささやかな八百屋店を引興すに辛労し、気丈な女であっただけに、己が甥を差置き、半兵衛を見込んで養子とし、愛したのであったらう。が半兵衛がお千世を妻に迎へるに及んで、己が愛を奪はれた様に気淋しう感じ、嫉妬の焔を燃して自から邪険な者となり、従順な嫁をいぢめたて、それが日々に深刻となった。

②海音『心中二つ腹帯』の評より

家政に苦しみ抜いた姑は、睦じい若夫婦に対して妬みを感じ、邪魔者視した。これを知る總ての者は、邪険な姑を憎んで若夫婦に同情した。姑は嫁の派手好きに難癖を附けて去らうとする。

この曲の鑑賞としてこれはとりたてて異論の出るものではあるまい。ただ、原因を専ら姑の嫉妬心に置いているわけだが、評者のそういった解釈はしばらく措き、作者自身がそこをどう書いているか。文脈に従って見て行こうとするものである。まず衝突の当事者である姑とお千代のうち、まず明らかに書かれているお千代の側の何らかの欠点とか落度を、可能な限り抜き出してみる。

I 海音

①お千代・伯母の登場時の紹介(地の文)

苦もる露も情知る。ゆかりに摩くなぎ袖や。小褄に色を抱帯はでな姿の女房に。婆の連立つ其風情。荒れし軒端に三日月の。光こぼるゝ如くなり。

②泊り宿の亭主与次兵衛の詞

町方のお内儀にはばつとかうとな御風俗。

③千代の家柄に関する、伯母の詞

こなた(半兵衛)は元が由ある身仁右衛門殿も歴々。千代が一家は吹けば飛ぶ。

④千代に関する、伯母の詞

器量はこなた(半兵衛)の覚えてなり。ちつとの落目は派手なれど若い時が二度はない。

⑤半兵衛の詞

堪忍するが町人風。女房は又当世の風。世間の人が誹らうが母者人がくすべうが。此ばつとした俤を。我等が宿のお千代じゃ

⑥嘉兵衛の詞
かね〳〵お主も知る通り役に立たずの嫁御寮
⑦お千代自身の詞
不調法なる自らが悪い所を陰になり、日向になって明暮に、
⑧姑の詞
お前の様なよい衆の嫁御にしては似合はうが。此方づれの内にて飯をも炊かにやならぬ身で。肌には小袖鼻紙は。延べでなければ手に觸れず。わしらはお寺の奉加さへ百目の銀は太儀なに。五両とやらの櫛を挿し鳥甲程髷出して。太夫の道中する様に狭い所を八文字。そこらあたりの青物は。踏み潰されて芥になる。其費でも積つたら此身代はひづみましよ。是が八百屋のお内儀に成り遂げうかとえせ笑ふ。

右八項のうち③は除外してもいい。家柄が問題になって去られたという事は全く見えていないからである。次に近松に眼を移してみる。

Ⅱ近松

①お千世の服装に関する地の文
駕籠の戸あくれば打しほれ目元しぼよる、縮緬の、二重廻りの抱へ帯
②千世に関する父平右衛門の詞
去年聟入せし折から、不調法な娘を進上いたした
③千世の行為に関する父平右衛門の詞
半兵衛是見や此しどなさ、歸らんといふ嬉しさに、親の病ひをか共いはず、悦ぶ顔を見る親の、心の内の嬉しさを、叶はゞ見せて禮いひたし、とりしめのないおろか者伊右衛門夫婦の気には入まい、たのむはそなたの心一ツ
④千代自身の行為
……此戸棚のほこりはいの、奥の疵もまだふさがず、香の物も見廻たし何から為うやら気がうろつく、ゐ付た所にゐて見よととんと坐りし茶釜の前、湯をわかして水に成

海音は、千代の欠点を、姑の口からだけでなく当人や当人の身内である夫・伯母、さらに第三者にまで言わせているので、公平に言って八百屋の女房にはあまり相応しくない派手な所のある女である事が了解されてくる。近松の説明はその点に委曲をつくしているとは言えないだろう。しかしそれは「説明」に言葉が尽されていないというだけの事であって、就中③④は、行きとどいた海音の①から⑧に十分太刀打出来るとも考えられる。つまりこれが近松の所謂「あはれをあはれ也といふ時は、含蓄の意なふしてけつく其情うすし。あはれ也といはずして、ひとりあはれなるが肝要なり」であろう。

たとへば松島なんどの風景にても、(中略)其景をほめんとおもはゞ、其景のもやう共をよそながら数〳〵云立れば、よき景といはずして、その景のおもしろさがおのづからしるゝ事也。

(『難波みやげ』発端)

近松は人物の些細な行為二つで、その性格を端的に暗示している。恐らくたれしもこの二項から、お千世という人物の心象を浮かべることが出来よう。可愛い所があるが実務的でない(と言う様な換言をして行くと次第に意味がなくなるが)人物と言えばいいか、兎に角近松は海音とは全く異った方法で描いているわけである。

離別の原因は、お千代の側にだけあるわけでは無い。姑はどうであろうか。

Ⅰ海音

①千代の伯母の詞
姑御のさがなうて取りにくい御機嫌に、辛抱するは何故ぞ
②半兵衛の内心を説明した地の文
養ひ母の胴欲さ思ひ廻せどさすが又
③青物づくし
練れた親父は結構者ふきの姑にがロに、嫁菜の袖をひたし物
千代とはあだの女松茸
④姑に関する説明(地の文)
詞のあとも針を持つ姑はつこど声
⑤姑に対する批評(地の文)
女の性は嫁や子の中も法界悋気ロ
⑥姑に対する同行衆七兵衛の忠告
こなたの様に言ひ立つれば、詫言の手はあがれども。どこを聞いても其様によい事ばかりは揃はぬもの。
⑦仁右衛門に対する同行衆の忠告
仁右衛門殿。そなたもちつと物言はしやれ。嗅がこはさに黙つてか。
⑧姑に対する嘉兵衛の詞
胴欲なは姑御。嫁一人が憎いとて大勢に憂身を見せ。嘉兵衛は爰を出て行くと明日から路頭に立ちますぞや。(中略)それでも嫁が去りたいか堪忍がならぬか
⑨右の詞に対する姑の行為
……堪忍がならぬか」と恨みてもかこちても、心つれなく返事せず見向きもせねば詮方なく。

海音の場合、さらに姑の金銭欲が離別にからむ。これは近松では全く無い要素である。

⑩姑に関する嘉兵衛・利介の詞
ナント利介。お婆が先の気相でも。寺同行の御意見で。邪険の角が折れうかい。イエ〳〵存じも寄らぬこと。生れ付いた熊手性。今度の起りも根が欲から。按摩取の印可めが。跡先なしの饒舌ロさる浪人の娘とやら。年は十八敷金は大金で七十両氏系図より確かなる商人へやりたいと。頼まれます
⑪姑自身の詞
二三十年身の油絞り溜めたる金銀が、(お千代の為に)忽ち水になる事を見ながら孫がかはゆくば、はてどうなりとなされませ。したがわしには暇下され。短い浮世に気に入らぬ顔見て修羅を燃そより。頭こそげて未来をば、助かる様に致さうと緩む気色はなかりけり。

以上のうち⑤は、一寸注意を要する。この章の最初に樋口氏の評「姑は睦じい若夫婦に対して妬みを感じ、邪魔者視した」を引いたが、あれはこの⑤を一つのより所として考えられたのかとも思われる(他に嫉妬に類した叙述全く無し)。だがこれは、半兵衛がつれ戻った千代に逢いに行っている事に対する法界悋気であって、そもそもの離別の原因として掲げうるかどうか疑問である。むしろこれは、除外すべき項かもしれない。

Ⅱ近松
①姉お軽の詞
気の取りにくい舅姑持たお千世
②お千世自身の説明
道具にそへ暇の状は跡から、先いねと譯も言はず、お腹に四

月ただもない身を、姑御が手を取てかごに引ずりのせ、むごいつらい……

③姉お軽の詞

子の有物を夫の留守隙くれる姑、心に一物有はいの、伯母聟ながらそなたの親分、高麗橋貳丁目川崎屋源兵衛殿指置て、直に爰へ突付る仕方も悪し、

④地の文

女房は内外の世話に五つも年ふけて、朝から晩まで気は苛立て

⑤半兵衛に対する姑自身の詞

さぞおれが事そしりやつつろ、十五年世話にした、親の嫌ふ女房に随分と孝々尽し、親には不孝尽しや、恩しらずめと畳たゝいてわめき居る

⑥姑に対する伊右衛門の詞

ハレ嚊何をやかましい、又しても〳〵半兵衛さへ見れば、敵の様に云ふ人じや

⑦半兵衛に対する姑の威嚇

必ず(千世を)去りやゝ、間に合いふてだましやれば、コレ此母が咽笛を出刃庖丁でちよいじやぞや、母殺すか女房さるか、それからはそつちの勝手次第

海音は、姑の胴欲――欲が深くて自分勝手(残酷)だ〈明解国語辞典〉――な人柄を、金銭にからめて、十分に説明する。従って前のお千代に関する各項を参照すると、離別に至った原因や経緯が、いわば情理兼備えて理解できてくる。確かに海音は、周到に説明し筋の構築をしている。これに対し近松は、人間同志の衝突が全てだという感が強い。就中姑の強烈な人柄が前面に押出されている。事実金銭もからんでいない。

一体近松海音比較論で「宵庚申」「二つ腹帯」の対照になると、必ず中之巻がとりあげられ、近松の人情・海音の義理が言いたてられた。それに関して私は全然異論はないのだが、たゞあれは場所も登場人物も異なる二つの場面であった。環境・情況の等しい二物の比較を心がけるならば、下の巻、就中姑をとりあげるべきではあるまいか。作中に於ける姑の位置は「宵庚申」「二つ腹帯」も変りは無く、この離別及び心中を捲起す立役者であるが、その人物の書かれ方に関しては甚だ大きな懸隔を持っている。そしてその点が近松・海音の本質につながるものではないかと考えるからである。

三

姑に関する言及のうちI海音の第⑤項は、詳しく記すと左の通りである。

サア半兵衛の参りやつた庚申様は石町。伯母の所へ先度から嫁の千代めが来てゐるげな。顔突合せ夜もすがら庚申待をしをらうと、女の性は嫁や子の中も法界恪気口

かねて私が繰返して来た通り(註一)、右の引用文は、文体的に二分出来るわけであって、初めの二行余は作中人物の会話、終り一行傍線部は、作者(語り手)が直接に語る作中人物姑に対する批評である。批評と言っても時には、批評性が極めて稀薄な単なる叙述に近い場合もあるが、作者(語り手)が作中人物を観客にどう印象づけようとしているかその姿勢の表われと見られる限り、批評の名で一括しておく。海音作中に姑にかかわる批評句をさがすと、右の一例以外は、

④の

詞のあとも針を持つ姑はつこど声

のほか発見できなかった。他にはせいぜい姑の頑固さをあらわす若干の行動の叙述「緩む気色は無かりけり」「えせ笑う」等があるだけである。近松はどうであろうか。

(1)女房は内外の世話に五つも年ふけて朝から晩まで気は苛立て

(2)……と商売が八百屋とて八百色程言ひつくるロせか〳〵とせ

わしきは、大晦日の生れかや

(3)……とこわい目知らぬ我侭たらたら

(4)(なむあみだ、松よ、又見世の吊柿(つるし)くらふな、アなまみだ)なむあみだぶつに取ませて、ぶつ〳〵いふてぞ出にける

(5)母は念佛の回向より、嫁女夫(よめめうと)の願以此功徳気がゝり、よそにゆるりとゐる空も、店さし比にによっと帰り

(6)……と半兵衛に合図の詞、嫁は知らぬと思ひこむ、是ばつかりは佛也

いずれもあからさまな非難や揶揄・嘲笑が含まれ、その行為も仏語を用いて戯画化されている。海音との差違は、単に批評の量だけでなく、その鋭さや巧みさにあると言うことは、これら若干の例からだけでもわかるであろう。一体に、近松の文章というものは、会話が、作中人物を貴賤都鄙各々品位に応じてその実を写し、他の文が雅俗折衷の技巧をこらした美文である事は、すでに以貫の近松批評に指摘されている所であり(註二)、事実、近松の地の文は、海音のそれより豊かに肥えている。しかしそれは単に他の文に技巧がこらされているというだけでなく、その中の批評句に大いに見るべきものがあるという事を含んでいるのである。文体から見た近松・海音の差も一つそこに見る事が出来る。およそ近松の作品を一寸読めば、批評句にはよくぶつかるわけで、ここに若干例をあげてみよう。まず『宵庚申』に出る青坊主に対するものである。

○……と言捨歸るそゝくさ坊主未来頼(たの)むはあぶな物

この人物は一寸使いに来ただけの全く端役の青坊主だが、これだけの嘲笑的言辞が附けられている。同様の例を『冥途の飛脚』にみえる出入の屋敷の若侍からひく。

○……と徒士若党も刀の威光銀ごしらへも胡散成なまり散らして帰りしが

『大経師昔暦』の悪役助右衛門

○……主手代助右衛門、此家のたばね綿の小紋の羽織、主も心を奥嶋の袴もと渡りの昆布の皮、硬張(こはば)つたる顔付にて

『重井筒』の下女手間取

○……とのこぎりくずの言ひかひなき猜みも下(とも)の役ぞかし

『堀川波鼓』の彦九郎

○……かへす刀に止どめを刺し、死骸押遺り刀拭い、静〳〵しまふて立たりし武士の仕方のすすどさよ

『今宮心中』の貞法

○……と泣ひつおどしつさま〳〵に、慈悲心余る涙の異見後世に入りたるしるしなり

『生玉心中』の嘉平次

○……と計にて、親の膝に打もたれ、聲も惜まず歎きしは、性(せい)は善成ル涙也

『心中天の網島』の三五郎

○……とあほうの癖に軽口だて苦笑ひする計也。

『鑓の権三重帷子』のおさゐ

○……と、櫛笥鏡臺片付けて塵掃く羽根の二つ羽も、比翼の悪縁底深き、

最後の例は、予言・前表と言ってもいいものだが、作中人物ないしその行為を、それらより一段高所から見て色々言うという態度方法は、批評の中に加え得るものである。さて、以上並べたような例は、近松作中のいたる所に発見できるが、海音ではこれに比べて甚だ稀である。あっても、痩せ枯れて、面白味や的確さに欠けている。

海音は専ら、前に見た如く、種々の作中人物の口を通して姑の悪を指摘しているわけで、ただ地の文中で作者がのり出して来て直接法の批評を放つと言うことは無かったわけである。

しかし作中人物を嘲けり笑い時に罵倒するのは、何も地の文中のそれに限るものではない。近松が『宵庚申』で行なったもう一つの方法は、姑自身に逆説的な台詞をしゃべらせるという方法である。一例をあげてみる。半兵衛が親に孝行を立てる為、自分の口から離別の宣告を約束した時の、姑の台詞である。

○ヲヽ嬉しい〳〵、おれも鬼には成とむない。必らず去りやや、間に合いふてだましやれば、コレ此母が咽笛を出刃庖丁でちよいざそや、母殺すか女房去るか、それからはそつちの勝手次第、アヽさらりと穢土の苦が抜けた、此世からの生佛とは己が事、

そして南無阿弥陀の念仏を唱えて出て行く。鬼の様な姑が鬼になりとむないと言い、此世からの生仏と自称し、念仏を唱える。その矛盾・滑稽を近松は繰返し用いている。

○（先に引いた(4)なむあみだ、松よ、又見世の吊柿云々）

○なふお千代戻りやつたか（中略）ほんの生如来が見たくば、己じやと思や、長うも無い浮世に、むごい辛い目見て何にせうなふいやヽの、コリヤ半兵衛、走りの出刃庖丁よふ磨かして置いたぞや、ちよいとさはつても剣じやぞ、アなむあみだ佛〳〵

さらに、半兵衛の口から言わせたにせよ、自分の意のままに姑去りにした嫁に対して、

○コレ嫁御、おりや去らぬぞや、親のままにならぬはめうと、是非がない。

そして、泣いているお千代に対して、

ムヽ其涙は、まだ母に恨が有さうな有なら云や、聞きませう、イヽエイヽエおじひ深い姑御に何の〳〵

とまで言わせている。近松は慈悲と寛容の宗教である仏教の用語をこの人物にぶつける事で、効果を倍加させるという技巧を用いている。海音に見られなかったこれら一連の意識的な操作――それを称して私は、近松の旺盛な批評精神とし、近松文体の一特徴として指摘しておこうと思うのである。

四

問題はここで当然、それでは姑と千代とどちらが悪いと作者は書いているかになる。これまで見て来た如く、海音は、お千代の欠点も姑の胴欲も、公平に等をつくしていた。近松も、一応はその双方に言及しつつも、姑を糾弾する事に於いてはるかに性急激烈であった。それでは『宵庚申』にあっては、離別・心中という事件の元凶として、姑は追求をうけているのだろうか。当然、理論的には（我

我の常識ではと言っても同じだが）そうなるはずだが、作品に従って行く限りそうではない。一体そもそもの原因は何だと言うのであろうか――丁度『宵庚申』に次のような部分がある。

昨日もくれ〳〵いふ通り、（母は）佛法の端も聞入れ物の慈悲も知った人、我甥をさしのけ、他人の身共に跡しき譲る心からは根から歪まぬ是証拠、人には合縁機縁血を分けた親子でも中の悪いが有物、乗合舟の見ず知らずにも、可愛らしいと思ふ人も有、人界のならはしは斯うした物、いとしぼげに根からの悪人でもない母を、其方故に邪見者と言はせては、女夫の者が後生も悪い

これは、お千代に対する半兵衛の台詞であるから、作者の意見の直接的表現ではないが、以前お千世が強いられて（心にも無く）「おじひ深い姑御」と言ったあの場合とは異なって、半兵衛の本心からの発言として書かれている事は間違いあるまい。ここに至って姑を、「根から歪まぬ」「根からの悪人でもない」と、弁護的言辞のある所が注意される。その根からの悪人でない人間を、今悪人にしている何かがある。それは要するに姑とお千代との関係ないし結びつきだと言うのであるらしい。悪いのは合縁機縁だった、つまり人ではなくて人と人との結びつきなのだから、これは縁次第で、人力を超えた何かにかかわる。ここまで来て我々は半兵衛の台詞の中でそう言った何かに出会う事になる。

それでは、作者が今まで糾弾して来た姑の人柄との関係はどうなるのか。半兵衛が言う如く、姑にとってもこの事件が合縁機縁の問題ならば、姑さえ一種の被害者に過ぎなくて、作者（語り手）からあれ程まで悪しざまに罵られる事は無かったのではないか。何か肩すかしを喰った気分になる。これを近松の挫折・限界と言ってのけるのは容易だが、それは研究の挫折になるかも知れない。とは言え右の極めて素朴な疑問に即答するのは私にとって容易でなく、ただ試答を種々考えている段階である。例えば、やはり、作者と作中人物の分離という事、また心中浄瑠璃という様式と作中人物の性格というリアリティとの関係という事等々、である。そのうち一つ、従来考えて来た事（註三）として、性格の軋轢といういわば人間の領域と、宿命・運命という人間を超えた領域と、この二つのものは、何らかの形で分けられているのではないか、という事がある。作中人物たちは、当初から思いのまゝに運命に翻弄されているのではなく、やはり人間段階の問題というものはあって、ただそれを超えると運命で処理するのではあるまいか。『宵庚申』中之巻に、去られて実家に戻った娘千世に対する、父親の左の言葉がみえている。

三度はおろか百度千度去られても、去らるゝに定りし前世の約束と思ひ諦らむれば、悔みもせぬ憎ふもない

懊悩や憎悪が無益だと判明したら、運命と思ってあきらめるという方法である。これは勿論極端な場合だが、言われているのは、そうした方が便利・好都合なら、運命を借用して切抜けるという、いわば「生活の智恵」、極めて現実的な運命観である。こういうものを厳密に運命・宿命と言っていいか否かは疑問だが、確かに人間の領域という水平の面と、それを超える領域――いわば垂直の面と、二つのものが意識されている言えるであろう。

ここで海音に目を移してみる。「二ツ腹帯」第三、嘉兵衛の言葉に「胴欲なは姑御。嫁一人が憎いとて大勢に憂身を見せ……」とあって、姑が元凶として追求されていた。しかし地の文中で作者が何

かを言うという事も無く、心中の当事者二人がその点に言及しているのも、左の台詞の他にはない。

心中という二文字は。流れの女に限りしと昨日は余所に思ひしに。今日は夫婦が身の上に飽きも飽かれもせぬ仲を、由ない障りに隔てられ仇に朽ち行く是非なさ

ここで問題は当然「由ない障り」であるが、姑以外のものを指しているとは考えられない。海音は、原因に関してはこれ以上何の言葉も費していないのである。すべては人間という同一平面上の者達の間での事であり、ある距離を保って、又ある高みに立って、これを眺めるという事は無いのである。

ところで先に、旺盛な批評精神を近松の文体に見て来たわけだが、一体、批評とは一口で言えば対象を離れる精神の事であり、とりもなおさず、絶えず覚醒する精神、また陶酔拒否の不幸な精神と言ってもよかろう。しかしこれは何も近松が例外的にそういう精神を所有する条件にあったという事では決して無い。すでに別に述べた通り(註四)、およそ語り物の作者・語り手は、そうなるべき文体を背負っているのである。浄瑠璃という具体例で考えてみればたゞちに了解されるが、語り手は作中人物である個々の人形になり変って台詞をしゃべり泣き笑いする。と同時に、傍観者になって人形を横目で見やりつつ説明したり誉めたり揶揄したり、時にはそれらの不幸な人形達の行末を憂えたり予言したりする、そういう文体を背負っているわけである。ただ近松は、それを極度に発端させた、あるいは駆使したという事に過ぎない。「八百屋尽し」というものが、「宵庚申」「二ツ腹帯」共にみられるが、この部分の評価は如上の点に関連し興味深い。近松はこれを「八百屋半兵衛 女ぼうおちよ みち行」に用いている。

参りの人に打まぎれ、忍び出るも商売の八百や萬を一文字に半兵衛といふ名にも似ず、只根深くも思ひつむ若菜心のつきつめて詞の義理にはじかみや、ちしやはまどはず勇者はおそれぬ生れ付さすがは武士の種ぞかし(以下略)

ねぶかやちしやを通じさせた言葉の遊戯だが、「道行の青物づくしは場合に不釣合なわる洒落である」(藤井乙男氏『近松全集』解題)という意見は、大方の同意する所であろうし、「二腹帯の方は、第三の書出しにあっさり使っただけに却って目障りにならぬ」(同)も同様であろう。海音は第三の冒頭に、

世の中はしんき〳〵の新うつぼ。地水火風を借住居。光陰早き八百屋見世内証ともに吉野葛。練れた親父は結構者ふきの姑にがロに。嫁菜の袖をひたし物、千代とはあだの女松茸(以下略)

とある。藤井氏は、「宵庚申」中巻を「実家における親子姉妹夫婦の情愛を書きまぜた一段はしんみりした情味の深い妙文である」とほめた後につづいて、八百屋尽しをけなしておられるが、まさにそのように浄瑠璃一曲は、情緒纏綿たるまろやかなものと期待されているわけであろう。甘美であれ悲痛であれ浄瑠璃は文体的に(註五)そういうものであり得なく(少くなくとも、そういうものである状態が持続する時間は必ずしも長くなく)しば〳〵裏切られる。私共は陶酔の中に乱入して来る夾雑物、せつかく積みあげた積木を足蹴にしてつきくずすものに対面しなければならないわけである。悲痛で哀れを極める道行文に、野菜をよみこんだ言葉の遊びが入る事を不可解としない精神を了解しなければならない。

では近松の浄瑠璃は、つきくずされた瓦礫の山なのか。もとより

そうではない。批評は結局何かを見通す事になり、そのむこうに運命を見たわけだが、人間が自分より大きな何かの存在を意識しその前に死ぬ時、悲劇の発生する条件が整うことになる。自分より大きな何かだと思っていたものが、後になると実は小さな何かだったという事も有り得るはずで、今日ではそう言った悲劇の相対化という恐るべき現象はさけられぬが、しかし近松当時はそれの無い幸福な時代であった。海音にあっては明瞭ではなかったけれど、近松の描いた半兵衛は、ともかくも自分を超えた何か大きなものを意識し、その前に身を投じ、見事に死ぬことになっている。

（梅花女子大学助教授）

註一　関西大学『国文学』第三十五号（昭和三九年一月）所載「近松浄瑠璃文体の批評的要素」・大阪大学『語文』第二十五輯（昭和四十年三月）所載「鑓の権三重帷子論」

註二　「浄瑠璃文句詳註難波土産」発端。

註三　前掲『語文』所載論文二。

註四　＝註一

註五　文体とは作者（語り手）が観客・作中人物に対処するその姿勢のあらわれと考える。前掲『国文学』所載論文参照。

（一九六六・五・四）